

古代ローマにおける残酷さと敬虔について

仲 島 陽 一

一 問題の所在

古代ローマは西洋文明の直接の源である。少なくともその最大の源の一つである。その古代ローマについて、「残酷さ」が指摘されることがある。だとすればそれはなぜそうであったのかを私は知りたい。しかしそれは難しい。そもそも古代ローマの「残酷さ」というかたちで主題化された先行研究を知らない。また、「残酷さ」というのは「心性」(mentalité: mentality)に属するものであろうが、そもそもある心性の「原因」をどのような領域に求めるべきかが大問題であろう。本稿でもこの問いへの探求はほとんど進まない。ところでこの問い方には、残酷でない他の文明が前提されていることになる。容易にわかるようにこれは単純化されており、残酷なところをまったく持たない文明はあるまい。他方で残酷なところしかないような社会は存続し得まい。つまりどの文明にも残酷なところとそうでないところがあり、古代ローマもそうであるはずである。もちろん、全体的にみて、ある文明が他の文明よりも比較的より残酷であるとかないとかはあろうし、私としては、古代ローマがその意味で「比較的」残酷なものであったという仮説を保持はする。しかしその論証やその原因の探求よりも、まずは古代ローマ内部における残酷さとそれに対抗するものとの考察していくことにしたい。

ところで古代ローマの「残酷さ」を印象づけるものは何であろうか。何よりもまず、残酷な「見世物」が挙げられよう¹⁾。生き物同士を戦わせるのも既に残酷であるが、これは多かれ少なかれほとんどの文明にある。古代ローマで特徴的なのは、猛獣対人間、人間対人間の戦い²⁾で、人間の死も織り込まれている見世物である³⁾。現代でも闘牛などで人が死ぬことがあってもあくまでも事故であるが、古代ローマではそうではない。また処刑として獣に食い殺させるということは他の文明にもみられても、暴君による例外的な出来事であって、古代ローマほど制度化されたものはあるまい⁴⁾。ローマでは前264年に「牛の広場」で初めて開かれたという剣闘士競技はエトルリアなどから流入したものであり、本来の「ローマ人」のものではないと言われようか⁵⁾。しかし起源はどうあれローマ人はそれを強いられたのでなくとりいれたのであり、それが定着しほぼ全国民的な娯楽になったということからは、「ローマ文明」の重要な要素と言える。

政治における残酷さはどうか。対外戦争の「外敵」に対して、ローマが他より特に残酷であったようにはみえない。民間人を含めて大量虐殺したとか、捕虜をとんでもなく虐待したとかの史実が、ローマに多いようにはみえない。ただし戦争関係では次の二点で残酷さが平均よりは強

いように感じられる。一つはそもそも建国当初から戦争中であることが多いという事実。もう一つは、戦争に対して肯定的すなわち好戦的性格が強いこと、「ローマの平和」もローマ史全体の中では一時的であり、またそれは力による支配が成功した結果であって平和主義によるものでなく、少なくとも当事者としてのローマ人には（服従したものへの寛大さはあっても無条件の）友好や和親の追求は感じられないということである。また内政における「残酷さ」は古代では最も目立つように思われる。共和政末期のマリウスとスラの時代の政争もすさまじい。帝政期については言うまでもない。暴君がいなかったような国はほとんどないこと、立派なローマ皇帝もいたことは事実だが、非道の極みのような皇帝が（暗殺などされながら何代も）続いたことは、ローマ史の印象的な要素であろう。

直接には、見世物の残酷さは民衆の、政争の残酷さは権力者の、残酷さを表わしていよう。そして両者は関係し合っている。残酷な見世物は、厳密には国家主催の制度というより、皇帝をはじめとした政治家が自分の名と費用で民衆に提供するものであった。民衆の要望にこたえるかたちで自らの人気と支持を買ったのである。対外的また内的騒乱の荒々しさとかうした荒っぽい趣味は、互いに因となり果となったであろう⁶⁾。

こうした見世物の中心舞台となった円形闘技場は、外形的には、古代ギリシャ以来の円形劇場を継いだのかもしれない。後者では演劇が楽しまれた。ギリシャ悲劇も少なくともどちらかと言えば残酷であろう。ギリシャ悲劇を模倣しようとしたローマ人はセネカであるが、それでもセネカのもののほうが残酷さが強い。

ローマの「民族精神」をある意味で残酷さとみ、国祖ロムルスが母でなく狼の乳によって養われたという伝説を挙げて、「ローマ人の生活のはじめが荒れた粗野さのなかで、自然的人倫の感情の排除」にあり、よって「家族関係は美しく自由な愛と感情の関係としてでなく、[...] 苛酷さと従属と服従の原理が現れる」と位置付けたのはヘーゲルであった⁷⁾。勿論私達は、ここでヘーゲルが、ロムルス伝説を事実として受け取っているとか、また狼に育てられた人間とその子孫は生物学的・遺伝的に家族的情愛に薄くならざるを得ないと考えているとか、みなす必要はない。それでもこの神話がローマ人自身に受け入れられていたものであることから、彼等の本質または原理を示す象徴とみなしていよう。ヘーゲルの把握は、多くそうであるようにここでも、具体的内容への明敏な着眼とともに、独自の（弁証法的）論理的構成による位置づけも伴う。すなわちギリシャの「家族的人倫」に対してローマの「法的状態」が反措定され、ゲルマンのキリスト教に止揚されるのである。この図式は妥当であろうか。後世に対して「ローマ法」が果たした役割の絶大さは、この図式に有利な材料である。ローマ史そのものにおいても、無法状態としか言えない時期はありながら、全体としては法を重視する意識は、前近代の他の民族よりも強かったように思われる（マヌ法典を持つインド人については、よく知らないので留保する）。しかしギリシャ人もまた、ペルシャ的専制に対して法意識を自らの原理として誇ったのではなかったか⁸⁾。無論ヘーゲルもギリシャに法がなかったと思ってはいないので、ローマを「家族的人倫」よりも「法」、と両原理を対置したことの意味が問題である。

次の二つの事実は、ヘーゲルに有利な解釈をもたらすように思われる。一つは、ローマ最古の成文法とされる「十二表法」において、父によって三度売られた子は自由人とみなされる、という規定があることである。言い換えれば父は子を二度まで奴隷として売ってよいということである。こ

ここでは冷酷な父権が法的に制度化されている。もう一つは、共和制の父であるブルトゥスが、初代統領として国家のために我が子を処刑したことが重くみられた（ためにその子孫が国家篡奪を図るカエサルへの歯止めとして期待された）ことである。ダヴィドの有名な絵は彼の葛藤をよく描いており、子を思う親心は普遍的とも言える。けれども彼の「徳」が称揚されたのは「人情」に打ち克ったからこそである。家族はローマにおいても重要と言えるが、それはむしろ非情なイエ制度であり、国家主義が彼等においては優越している。

ローマ人自身の意識はどうか。哲学などの反省的意識において「残酷さ」が主題化されているようではないとはいえ、これは今までどこもそうかわりはない。言語そのものから考えればどうか。「残酷さ」という日本語に最も対応すると考えられる英語は *cruelty* であり、近代ヨーロッパ語はそれにあたる、同語源の語を持つ。それはラテン語の（すなわち古代ローマ人の）*crudelitas* であろう。学習用の羅和辞典⁹⁾をみると、訳語は「残忍、無情」である。形容詞 *crudelis*（訳語の最初が「残酷な」）の名詞化とあり、*crudus* からの派生と示される。後者は、最初の訳語が「血にまみれた」とある形容詞であり、さらに *cruor* 参照とあり、これは「血。血滴。流血、殺戮」と訳語が出る名詞である。「血を流す」という即物的事象が由来かつ中心の観念のようである。「無情」という訳語も見えたが、感情的に苦しめる、という意味合いは少なくとも由来や中心ではない。文芸作品などでこの語がどう使われているかと言ったアプローチもあろうが、いまそこまでは手が及ばない。

二 ロムルス原理とヌマ原理

しかし、ローマ精神を建国神話を通じて考えるなら、（初代の王とされる）ロムルスだけでは一面的で、（二代目の王とされる）ヌマを相補的に考える必要があろう。そしてヌマこそローマの宗教的祖とされ、「敬虔」な人と特徴づけられている¹⁰⁾。ヌマの創設ないし改革はいろいろと興味深い¹¹⁾。家族関係で言うと、父が子を売って奴隷にしてもよいという法律において、正式な結婚をした息子については例外にしたという¹²⁾。未婚ならあいかわらず売り飛ばしてよいのであるから、たいへんな家父長制であることには変わりがない。それでも成熟した息子に独立した人格をぎりぎり認めるのは小さくない改革であり、権力的な親子関係から少しは人情的な関係への第一歩ではあろう。プルタルコスを見ると、ロムルスによる好戦的略奪国家のローマを、ヌマが農業を中心にしたより平和的な国に軌道修正したという物語となる¹³⁾。人類の「進歩」というものを考えるとしたら、残酷な暴力の克服が最も重要な内容であるべきだと私は考える。古代ギリシャにおいては、すぐれた学問や芸術にもかかわらず、平和主義や平等の思想は基本的に存在しなかった。争い（*αγών*）と強者の支配が当然とされていた（そして私はブルクハルトやニーチェとは違ってそれを肯定する立場はとらない）。ローマもまた尚武の民ではある。しかし平和志向の一面や、万民平等の思想の芽生えもみられる。そしてプルタルコスのヌマ伝では、狩猟や商業といった（対自然、対人間の）争いでなくそこから遠ざかる暮らしをつくりだす農を基本とした平和主義の社会＝宗教制度がここに垣間見られる。従来のローマ史論では、ヌマの位置づけが低すぎたのではなかろうか。ギリシャ精神について、「アポロンの」と「ディオニュソスの」の二原理を立てる見方があるが、ローマ精神について、「ロムルスの」と「ヌマの」の二原理を立てることはできないであろうか。

この際いずれにしても一種の単純化であることはもとより、「ロムルス的」と「ヌマ的」では前者がやはり主導的であることは認めつつも、それを補うもう一つの原理として後者を立てることに意味はあるのではなかろうか。そこでさらに、古代ローマにおける「ヌマ的原理」に思想的に倣うようにみえる例を拾ってみたい。

まず、この「ヌマ伝」でも言及されているピュタゴラス教団である¹⁴⁾。彼等はギリシャ人であるが地域的には南イタリアであり、初期ローマに多かれ少なかれ影響を与えたであろう。ここで従来の哲学史だと輪廻説が主に問題にされるのだが、そのいわば神学的面よりも、それと結びついて、殺生や肉食に対する反対を、心性の発達という観点からは重視したい。これは宗教観念としての(「敬虔」に近縁の)「清浄」の問題につながるが、何よりも最大の悪である残酷な暴力を克服する人間の歩みの一部をなす、感情革命の一つの足場と考えられるからである。ラテン語の「残忍」が「血を流す」ことに縁があることを私達はみた。農業はしかしそこから遠ざかるものであり、肉食主義の思想はその徹底である。

次にルクレティウス (Lucretius, c.94-c.55B.C.) である。エピクロス派の哲学を詩で著した『事物の本性について』(De rerum natura) がある。そこで彼は、生まれたばかりの社会では人々は「温和」であったという。「隣人たちは互いに他を害し合わない事を願い、暴力を受けることのないよう希望して、友誼を結び始め、[...] 誰でもみな弱者をいたわるべきであると [...] して、こどもたちや女たちの保護を託すようになった」と想定する¹⁵⁾。そしていわゆる文明というものが人々を対立させているとルソーを先取りする思想を展開するが、その際戦いを悪または「罪」とみなしている¹⁶⁾。確かに彼には、第二巻冒頭の有名な句があり、争う人々を高みの見物をする「楽しみ」を語るのは冷酷である¹⁷⁾。しかしここで彼は、戦いに参じて勝利の「栄光」を求めよというような好戦的思想に反対して、そこから身を引くことを勧める厭戦家である。消極的な反残酷思想と言えるのではなかろうか。「名誉」を評価するストア的心性と対立するだけではない。この書全体の冒頭では、人身御供の残酷さが批判され、「宗教とは、実に、かくも甚だしい悪事を行わせる力を持っているのだ」という有名な句に至る¹⁸⁾。名指されているのはギリシャのイピゲネイアの話であるが、ローマ宗教においても供儀は本質的なものである。「私が求めるのは憐みであっていけにえではない」というのはキリスト教の本質である¹⁹⁾。キリスト教以前の思想家である彼にとっては、供儀宗教の否定は宗教一般の否定になる。神へのお供えは多くの原始的信仰にあるとは言え、ローマの場合(餅や酒のような)植物性のものでなく動物であり、しかもまさに血を流すことが重要視されているようである。ルクレティウスはローマ宗教に表れているローマ人の「ロムルス的」心性の根本に反対している。一般にローマ人の哲学としてはストア派とエピクロス派がいわば二本柱とされ、特に前者がローマ人の心性に適合的であったとされる。そして図式的には「禁欲的」な前者に対し後者の「快樂主義」が対置されるので、前者のほうがより「道徳的な」思想にみえる。しかし前者の禁欲主義(および「不動心」)は感情的冷酷さを伴い、他方後者が求める「快樂」は精神的な穏やかなものであって、対立や争いをもたらす経済的富や政治的権力からは遠ざかるものであるという面を評価すべきであろう。

ヌマ伝を著したプルタルコス自身も、ここに挙げてよいのではなかろうか。プラトンの理想とともに、ピュタゴラスの徒としても描かれているプルタルコスのヌマは、史実として疑わしい面がある分、史家の思想の投影が強い。プルタルコスは、史家、エッセイストとしてのほかに思想家とし

でももっと重視してよいと思われる。思想家としてはプラトン派とされ、主に懐疑主義の面が言及される。それもあるが、プラトンそのものがピュタゴラスの影響を受けており、「プルタルコスのパラニクスム」のなかにおいてこの面も注目すべきではあるまいか。エッセイでは動物愛護思想も縷々述べられており、ピュタゴラス的輪廻思想およびヌマ的農本思想が、ロムルス的な狩猟・供儀的心性に対立しているとみられないであろうか。

また詩人オウィディウス（Ovidius, BC.43-c.AD.18）もここに挙げられる。その『変身物語』は、西洋美術の巨大な題材を提供したことでも知られるが、変身譚という主題自体がピュタゴラス的輪廻思想を想定させる。その最終巻はヌマの話から始まっている。そしてヌマが南伊クロトンを訪ねたとし、その地にピュタゴラスがいたと話を継ぐ。「獣肉を食膳に供することを非とした最初の人、このピュタゴラスだった」²⁰⁾と紹介し、彼の言として次のように記す。すなわち大地は「血なまぐさい殺戮によらない食べ物を与えてくれる」。かつての「黄金時代」では「平和が満ちていた」のに、肉食から「罪への道が開かれた」²¹⁾。こうしてピュタゴラスは肉食とともに、占いや供儀のために動物を殺戮するローマ宗教を批判する（ことをオウィディウスは記す）。

以上のような「ヌマ原理」は、いわばもう一つのローマ思想と言えるのではなかろうか。

三 古代ローマの「敬虔」

ヌマは「敬虔」な人と言われた¹⁰⁾。以下ではローマ宗教における pietas（さしあたり「敬虔」と訳しておこう）について少し詳しく考えてみたい。まず問題となるのは、この pietas がローマ宗教にとって重要性を持つかどうかである。デュメジルの大著『古代ローマ宗教』ではこれにしか触れていない。この「敬虔」が（「幸運」とともに）はっきりした神格を与えられて神殿もつくられたのは、前 191 年であったが、その設立の理由がはっきりしないという指摘である²²⁾。ただしそもそも、「先祖に対する敬虔は、既に伝統的ローマ文化の基本的な相であって、キリスト教がこれと対抗した」²³⁾ともされることから、それがローマ宗教にとって最も本質的ではないまでも、基本的な要素の一つではあると言えよう。この新しい事典では次のように、「敬虔」をむしろローマ宗教全体と重ね合わせた次のような指摘もある。「宗教的態度——ラテン語の pietas ギリシャ語の εὐσεβεία——は、観想でなく行動に属する。したがって宗教行為は信仰的であるあらゆる場で起こった」²⁴⁾。ではそれがどのような宗教性を示すのかを考える必要が現れる。この辞書の記述にあるように、それが源において「先祖に対する」ものであり、家族ないし氏族の制度と密接にかかわることがわかる。しかしそうすると今度はそれは特にローマ宗教の特質と言えるであろうかという疑問が起こる。M. ヴェーバーは、「確かにあらゆる宗教の大部分は、現世内的な敬虔の紐帯 [Pitätsbande] を規定もしていた」²⁵⁾と述べている。彼はこの宗教社会学においては残念ながらローマ宗教は主題として扱っていない。

そこで私達が考えることとしてさしあたり二つある。一つはギリシャ宗教との比較である。ギリシャ宗教に先祖崇拜がなかったとは思われない²⁶⁾。しかしギリシャに家族名がなかったことなども考えると、ギリシャに「家族的人倫」を、ローマに抽象的な「法的状態」を割り当てるヘーゲルの史観はいささか恣意的ではないかとの疑問が起こる。しかし短兵急に論断してはなるまい。彼が

念頭においているアンティゴネーは「妹」の立場からの情愛であり、他方ローマは確かに家族が重要であっても、それは家父長的なイエ制度であるからである。pietasを「先祖に対する」とする規定を私達は既にみた。埋葬や死者の「供養」が多くの宗教の源にあることは言うまでもない（私達にとっては、「孟蘭盆経」「父母重恩経」による日本的仏教でなじみである）。これに血縁的紐帯の重視が加われば、pietasはなき先祖へと同様に家父長へのものともなる。このもう一つの典型は中国の（通俗化された儒教と道教による）宗教観念であり、この場合のPietätはよりよくは「恭順」と訳されよう。古代ローマのpietasも、神々や祖先への「敬虔」が家父長への「恭順」と連続する観念にとらえるべきであろう。すなわちこの「恭順」は家族的情愛というよりまずはかなり権威主義的な「徳目」として理解すべきであろう。「愛」と訳したり、普遍的な「母性愛」で説明することは、現代人にわかりやすくはなるが、正確な理解には妨げにもなる。

もう一つの比較は、キリスト教とである。ヴェーバーがPietätを「大部分の」宗教の根底にみるというとき、（ユダヤの預言者の宗教を淵源として）「禁欲的プロテスタンティズム」にその注目すべき例外をみるという観点があることを、彼の読者は言外にみるであろう。ここで翻つてもう一度23)で引用した記述の最後の部分をみたい。古代ローマのpietasについて、「キリスト教がこれと対抗した」とあった。この含意としてはまず、キリスト教がこれを否定した、ということがある。キリスト教は先祖崇拜でなく、人間の自然的紐帯を直接には価値づけないことにまさに特質があるからである。しかしまた私が「対抗」と訳したemulateは単なる拒否や廃止ではなく、いわば同じ土俵で競うという含意があり、まねるという意味さえ含む。自然的な父母への「敬虔」は、キリスト教は被造物神化として排するが、そのかわりに彼等は「天の父」を（また少なくない宗派においては「聖母」マリアさえ）拝する。これは家族的心情が廃絶されるものではなく、キリスト教においても別の次元で保たれている（少なくともその面がある）とも解釈できる。ところでこの関係性は、子の親に対するものであるとともに、親から子へのものへも適用可能であり、キリスト教においてはそちらのほうが強くさえる。私は先に古代ローマのpietasを「愛」特に「母性愛」とするのは誤解を招くとしたが、次のような付け加えは可能となろう。すなわちそれははじめは家父長へのむしろ非情な「恭順」の義務という意味が強いが、後に「愛」の意味も生み出す源でもある。ケレニーは「人はpietasは親子の相互的關係において伝わる心術を特徴づけるという確認で満足し、そこで義務意識と義務への熱心さが支配的であると強調していた」がそれでは「pietasにおける特殊なものが注意されない」として、その乳によって囚われの親を養った孝女の、pietas神殿創設の伝説に言及する²⁷⁾。実定的ないし形式的な義務の遂行としての「孝」または「恭順」から精神的ないし内面的な愛情への力点移動があるのではなかろうか。この意味でpietasはキリスト教が少しずつ否定しつつまね、つまりつくりかえていったものであり、（ミケランジェロでとくに有名な）「ピエタ」はこの語が母性愛中心の観念に変容した様子を示している。

だがここではローマ内部に考察を限定しよう。そしてここで私が特にpietasをとりあげたかった問題意識をより説明できる。ローマ文化の卓越が表れているのは土木建設と法律軍事であり、つまり彼等は実用主義的な、悪く言えば潤いに乏しい民とうけとられ得る。情にほだされないストア主義はその哲学的表現であり、残酷な見世物はその俗衆的表現であるとも評したくなる。はたしてそうなのか。pietasはその反証にならないのか、ということである。部分的にはなる、と私は答えたい。ヘーゲルが、ローマの非情な「法的状態」をキリスト教への「否定的媒介」と位置付けた

のは、彼一流の強引な図式ともいえるが、結果論的な説明としては了解できなくもない（またこの点でローマの *pietas* と中国の「孝」との比較も面白からう²⁸⁾）。

pietas は最広義ではローマ宗教全般と重なり、はなはだ漠然としたものとなる。しかしその一面としては、制度的または習俗的義務というより、家族関係を基盤にした感情性、やさしさや同情（*pietas* は *piety* とともに *pity* の語源でもある）にもつながっていく要素を含んでいた。固定的な概念規定を与えるよりも、一つの精神的過程として動的に把握する必要があるだろう²⁹⁾。本稿ではしかし、着眼の提出と、その根拠および問題意識の説明をほとんど超えないこの小論となった。

クーランジェは、「古代の宗教と道徳はまったく家族的」³⁰⁾と指摘し、これに与えられる名が「敬虔 [*pietas*]」であるとする³¹⁾。彼はその「狭小さ」³²⁾を指摘し、「慈愛 [*charité*]」という観念を対置する。言うまでもなくこれはキリスト教の中心的道徳であり（邦訳書の「慈善」ではその含意が伝わりにくい）、この説のはじめにみた、*pietas* がキリスト教と *emulate* したというときの二義性はここに含まれている。儒家が「その鬼にあらずして祭るは諂うなり」などというのも、このような「閉じた」道徳の示すものであろう。エリアーデは言う。「ローマ宗教の社会的性格は、敬虔 (*pietas*) という言葉によって明確に表現されている。これは *pietare* という動詞（「けがれや悪い予兆を抑え、遠ざけること」など）と関係するものの、敬虔は儀礼の厳格な遵守ばかりでなく、人間同士の自然な（つまりは規範に従った正しい）関係に対する敬意を意味している。[...] 十八、九世紀の『人道主義的な』イデオロギーは、ローマの敬虔という古くからの概念を脱聖化しながら再びとり上げ、洗練したものにすぎない」³³⁾。近代啓蒙主義に対するローマの寄与としては、ローマ法に典型がみられ、ストア主義と結びついた、普遍性を持った平等思想が、やはり主要なものであろう。しかしエリアーデが言うローマの *pietas* も（思想というより）感情ないし心性として、(合理主義というより残酷さの克服としての) 近代ヒューマニズムへの底流として、位置づけられるのではなかろうか。

- 1) ローマでの見世物は、アウグストゥス帝時代に年 65 日程度、マルクス・アウレリウス帝時代には 130 日程度というので、日常的なものであり、無論地方都市でも行われていた。島田誠『コロッセウムから読むローマ帝国』講談社叢書メチエ、1999、19 頁。
- 2) 剣闘士競技についての研究史については、梶田知志「剣闘士競技研究百年史」『早稲田大学文学学術院研究紀要』第 52 号第四分冊、2007、参照。
- 3) 模擬海戦では、自由市民や青少年による無害なものもあったが、専門の剣闘士が動員されたり戦争捕虜が連れ出されて、「壮絶な大量処刑の流血の見世物」になる場合もあったという。木村凌二『帝国を魅せる剣闘士』山川出版社、2011、92 頁。
- 4) 古代ローマにおける処罰として「罪人」を野獣に食い殺させる見世物にしたことについて、島田誠、前掲書、110 頁参照。
- 5) 木村凌二氏は、エトルリア説に批判的な立場から剣闘士の起源について考察している。前掲書、71-74 頁。
- 6) 剣闘士競技に弁護的で「それほど陰惨で血なまぐさいものではなかったのかもしれない」と記す木村氏（同書、212 頁）も、ローマ国家の『軍国精神』をはぐくむには、非情で残忍な剣闘士競技は絶好の機会であった」（同書、254 頁）と認める。
- 7) Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte: *Werke* 12, Suhrkamp, 1970, S.348.
- 8) 拙稿「成文憲法という思想」『国際地域学研究』第 19 号、東洋大学国際地域学部、2016、112-113 頁、参照。

- 9) 田中秀夫編『羅和辞典』研究社（増訂新版）、1966。
- 10) Plutarque, Vies I, Belles-Lettres, 1964, p.198. プルタルコス『対比列伝 ヌマ 12 節』「敬虔」と訳したのは、*pietas* にあたるとされるギリシャ語 *εὐσεβεία* である。
- 11) プルタルコスの伝えるヌマは無論史実そのものでなくプラトンの理想によるものでもあるが、彼も伝統的要素を削除はできなかった、と仏訳者は注記する。Ibid., p.168.
- 12) Ibid., p.206 (17 節)
- 13) Ibid., p.190 (18 節)
- 14) 著者はまずヌマがピュタゴラスの親友であったという説を取り上げる (Ibid., p.179 : 1 節)。ピュタゴラスの思想全般については、拙著『哲学史』（第二章第三節）行人社、2018、参照。
- 15) Lucretius, *De rerum natura*, V, 1019-23: Harverd Uni.Press, 1959, p.412.
- 16) Ibid., V, 105: p.440.
- 17) 拙著『共感を考える』（第二部第一章二）創風社、2015、参照。
- 18) Lucretius, op.cit., I, 101: p.8.
- 19) 本稿初めにローマ文明の残酷さの「指摘」に言及したが、これがなされるのはキリスト教的観点からであることが多い。これにに対し、キリスト「教徒」やキリスト「教国」の「残酷さ」の実例をあれこれ挙げることは容易である。ただし思想および「エートス」の中核的な部分において、古代ローマに残酷ないし少なくとも冷酷さに親和性があり、キリスト教に残酷に反対する傾向をみることは妥当であると私は考える。拙著『共感の思想史』（第五章）創風社、2006、参照。ピュタゴラス的伝統との関係におけるプルタルコスの思想については、「モラリア」の中の「肉食について」など、参照。
- 20) Ovidius, *Metamorphoses*, XV, 72-74: Harverd Uni. Press, 1984, p.368.
- 21) Ibid., XV, 105: p.372.
- 22) G. Dumézil, *La religion romaine archaïque*, Payot, 1974, p.400. なお cf. B.North & Price, *Religions of Rome*, Cambridge UP, 1998, p.90.
- 23) *Companion to Roman Religion*, Blackwell, 2007, p.408. 強調は引用者。
- 24) Ibid., p.27.
- 25) M. Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, Tübingen, 1963, S.542. 強調は引用者。これがそこで特に問題にされるのは儒教においてである。しかし彼は『支配の社会学』など他の著作においても随所でこの *Pietät* をとりあげている。ただしそれだけにヴェーバーによって一般化されたこの概念と古代ローマにおける *pietas* とが完全に重なるとは限らないことには注意が必要であろう。
- 26) 悲劇作品では、アンティゴネーが（国家の敵であっても）家族の弔いをする事は「神々の掟」であるとしたことなどが念頭に浮かぶ。
- 27) K. Kerényi, *Die Religion der Griechen und Römer*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1963, S.122-123.
- 28) 儒教の「孝」または家族的恭順 (*Famienpietät*) が「自然と神性との緊張関係」をもたらさなかったことについて、Weber, op.cit., S.522.
- 29) J. Scheid, *Religion et piété à Rome*, Edition La Decouverte, 1985 は、題からはこの問題に最も近い著作と思われるが、ここでの *pietas* は最広義のものに近い。最終章は「主観的宗教性」と題されているが、*pietas* が内面化されていったということではなく、古代ローマにおける「迷信」の概念について（それ自体はもっともな説明）であった。著者はそもそもローマ人は「内面的敬虔 [*la piété intérieure*] [...] を知らなかった」(p.7) とする。
- 30) F.de Coulanger, *La cité antique*, Librairie Hachette, 1904.

31) Ibid., p.109.

32) Ibid., p.110.

33) エリアーデ『世界宗教史Ⅱ』 島田・柴田訳、筑摩書房、1991、123-124 頁。

Cruelty and <pietas> in ancient Rome

Yoichi NAKAJIMA

In Roman civilization, we see not a few factors that shows their cruelty. The gladiators matches and the open execution by fierce animals are remarkable examples which seem to support mentally their militarism. The myth that their first king Romulus was nurtured by a wolf may symbolize their heartless mentality.

But they had as their second king Numa, who brought about peace and introduced a peaceful economic system and religion. He may represent the tradition from Pythagoras that followed Lucretius, Plutarch and Ovid.

This tradition provides the other principle of Roman civilization, expressed in the word pietas (pity and piety), though it was restricted by their paterfamilias system. Beside their juridic thought of the equality, it was, says M.Eliade, also the other Roman resource from which the modern enlightenment have drawn their humanism.

Key Words

ancient Rome, cruelty, pietas